

17世紀西シベリアの植民と農耕地開拓

三上, 正利

<https://doi.org/10.15017/2344383>

出版情報 : 史淵. 91, pp.101-139, 1963-07-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

一七世紀西シベリアの植民と農耕地開拓

三 上 正 利

緒 言

- 一 ロシア政府のシベリア植民事業
 - 二 自由移住者の流入
 - 三 ヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の開拓
 - 四 トムスク・クズネツク地域の開拓
- 結 言

緒 言

本稿において筆者が考察するのは、次のような諸問題である。第一には、一七世紀において、シベリアに農耕地を開拓しシベリアの食糧自給をはかろうと企図したロシア政府の、強制的命令・徵募および流刑などによるシベリア植民事業は、如何に行われその成果はどのようなものであつたか。第二には、一七世紀のあいだに西シベリアの人口が増加し農耕地が著しく拡大されたとすれば、それは政府による植民事業の成果ではなく、主として自由移住者の来住と開拓の結果であり、それらの自由移住者とは、すなわち欧露からの逃亡者であつたこと。第三には、一七世紀のロシア人植民によつて、西シベリアではどの地域にどのような部落や村が建設され、その結果として西シベリアの耕地面積は如何に拡大されたか、などの諸問題である。⁽¹⁾

一、ロシア政府のシベリア植民事業

ロシア人によるシベリア征服過程のうちで、西シベリアのオビ川とその諸支流との流域を占める広大な森林地帯の征服は、すでに筆者が他の論考においてのべたように、ほぼ一七世紀の初期をもつて終了したのである。

ロシア人によるシベリア征服の過程において、この西シベリアの征服という段階までは、それ以後における東シベリアおよび極東方面における征服行動とは、事情に相違するところがあつた。シベリア征服の発端は流賊的なイエルクマク (Yermak) によるシベリア汗国の攻撃であつたが、西シベリアにおけるその後の征服政策の一般方針は、ほとんど完全にモスクワ政府の手中に掌握されていた点に特徴があり、西シベリア各地における征服計画や当面の課題はすべてモスクワにおいて立案され、モスクワからの指令に従つて、各地の地方長官 (voevoda) がそれを遂行したのであつて、それ以後の東シベリア方面におけるロシア人の無秩序な征服行動とは、事情を異にしていた。

しかし、このように、西シベリア各地の征服活動そのものは比較的秩序よく政府の統制下に遂行されたが、その後の植民過程は、必ずしも政府の計画どおりに行われたわけではなく、むしろ実情は政府の予期に反することが多かつたのである。この時代のシベリア植民における政府事業の成果は、あまり重要性をもたなかつたと見られるのである。以下しばらく、当時のロシア政府によつて遂行されたシベリア植民事業について考察してみよう。

ロシア政府は、ウラル山脈以東に新しく獲得された広大なシベリアの領土を確保し、シベリアの異民族から毛皮のヤサーク (yasak, 貢税) を徴集し統治してゆくために、ロシアの軍隊や役人をシベリアへ派遣したが、同時にそれらの軍隊や役人を給養する食糧を生産させるために、農民をもシベリアへ送る必要にせまられたのである。ロシア政府は西シベリア征服の初期から、この新領土の確保と開拓とのために、植民事業に努力する必要があつた。そのような事情のも

とに、政府によつて、すなわち皇帝の勅令 (ukaz) によつてシベリアへ派遣された者は、まず第一には地方長官 (voevoda) を頭とする各階層の勤務者 (sluzhiliye lyudi) で、貴族 (detsi boyarskie) 銃兵 (streltsy) 、「コサック (kazaki) 」、「司祭 (svyashchenniki) などがあり、そのほか陛下の農民 (gosudarevie krestyane) も送られた。またシベリアへは、政府の命令によつて、刑事犯から戦争捕虜にいたるまでの流刑者 (sytinie) も送られた⁴⁾。それらのうちで、本稿の目的とする西シベリアにおける農耕地の開拓という観点から特に検討を要するのは、農民と流刑者である。勤務者のうち可なり数の者が農業に従事していたと見られているが、これは後に触れることにする。

さて、すでに記述したことがあるように、この時代の西シベリアの土着諸民族のうちには農耕を営むものがあつたにしても、その原始的な農業はかれらの基本的経済とはなり得なかつたのであり、犁耕を営んだシベリア汗国のタタール族の農業でさえも、農耕はかれらの牧畜経済における補助的な地位をしめるにすぎない状態であつたから、シベリアを征服したロシア人は、現地で食糧を調達することは不可能であつた。そこで政府は、シベリアのロシア人農業が発達するまでの一七世紀末 (一六八五年) までのあいだは、北部ロシアの諸都市や諸郡に対して、シベリアへ送るための備蓄穀物 (soshnie zapasy) を供出する義務を負わせ、それをシベリアへ輸送することによつて食糧問題の解決をはかつた。すなわちカマ川の主流域のペルミ (Perm) 、「ソリ・カムスカヤ (Sol-Kamskaya) 」、「チェルドゥイニ (Cherdyn) 」、「カイゴロドク (Kaigorodok) 」、「北ドビナ川の支流ウィチエグダ川流域のウイミ・ヤレンスカヤ (Ym-Yarenskaya) およびソリ・ウィチエゴドスカヤ (Sol-Vychegodskaya) 」、「スホナ川流域のウスチュク (Ustyug) 」、「カマ川の北支流ヴィヤトカ川流域のヴィヤトカ (Vyatka) などの諸地方がそれである。しかし、シベリアへ到着した穀物の価格は遠距離輸送のために異常に高くなつたし、シベリアへの穀物輸送は必ずしも規則的には遂行されなかつたし、ことに北部ロシア諸都市における備蓄穀物の供出は、滞納がまれでなかつた。備蓄穀物を負担させられていた北部ロシアの住民は、一再ならず皇帝にシベリ

アへの穀物輸送の廃止を請願した。これらの諸事情は、ロシア政府にシベリアの農地開拓に努力するよう強いたのである。⁽⁶⁾

シベリアにおいて国家が組織した農耕地は、いわゆる陛下のデシヤチナ耕地 (*desyatinnaya pashnya*) であるが、ロシア政府がそれらの耕地を耕作する農業労働力を確保するためにとつた方法は、シュンコフ (V. I. Shunkov) によると、つぎの三方法であつた。第一には、欧露からシベリアへ農民を勅令 (*ukaz*) と徵募 (*prigor*) によつて移住させる方法。第二には流刑者を利用する方法。第三には、自己の自由意志でシベリアへ移住してきたロシア人を耕地に定着させる方法である。

第一の勅令と徵募によるシベリアへの移住は、欧露の農民にシベリアにおける土地のほか可なり多額の援助金や食糧、家畜、農具などを与えたり、課税免除や貸付金などの恩典を与えて移住させるのであるが、農民にとつては強制的な性質をもつ移住政策であつた。⁽⁷⁾ しかし、北部ロシアの農民をこのような強制的な方法によつてシベリアへ移住させることは、ただシベリア征服後の初期にだけ、すなわち一六世紀末から一六二五年ごろまでのあいだに行われたものであり、この方法は移住者を援助するための費用も多くなかり、また北部ロシアの住民からも移住の強制に対し苦情や抗議がでて、間もなく廃止されたのである。実際に転住させられた者の人数も少数であつた。後にそれに代つた方法は、シベリアの行政機関の代理人が北部ロシアへきて、自発的志願者の募集 (*verbovka*) を行うものであるが、これもシベリア植民史全体の間では、あまり大きい効果を収めた方法ではなかつたように思われる。

第二には、シベリア流刑者を陛下の耕地の労働力として利用する方法である。シベリアへの流刑 (*sylka*) は、すでに一六世紀末(一五九三年)から行われていたものようである。シュンコフの記載によると、シベリア流刑者数の近似値を計算したブツィンスキー (P. N. Butinsky) は、一五九三年から一六四五年までの間にシベリア流刑にされた者の数を

一、五〇〇人とし、また一六一四年から一六二四年までの一〇年間だけで五六〇人の流刑者があつたと計算しているとのことで、流刑者数は一七世紀後半に向つてなお増大していったという。一七世紀に著しい人数のシベリア流刑者があつたことは、大多数の研究者が是認しているようである。

しかし、シベリアの農地開拓に対しこれら流刑者の寄与した重要性の程度については、学者のあいだに意見の相違がある。シュンコフは、流刑者の意義を小さく評価している側の学者としてヤドリニンツェフ (N. Yadrinsev) とシチュエグロフ (I. Shueglov) とをあげ、大きく評価している側にブツィンスキーをあげている。そうして、ブツィンスキーがシベリアの農地開拓に対する流刑者の意義を誤つて過大に評価していることを批判し、次のように結論している。すなわち、一七世紀においてトボリスク地方 (razyad) の諸郡 (nyezd) への流刑は、農民人口を増加させる事業において何ら重大な意義をもたなかつた。流刑者の著しい部分は国有地の耕地農民 (Pashennie krestyane) にされたのではなく、勤務者 (sluzhnie lyudi) にされたのである。その理由は、当時シベリアにおけるロシア政府の戦力強化が不可欠であつたことと、農業に熟練していない者を農民にしても必ずしも期待された効果をあげなかつたことである。トボリスクは、特に一七世紀の半ば以後には、シベリア流刑者の中継地として役立つたのであり、トボリスクへ到来した流刑者の多くは、ここからもつと東方のトムスク地方およびレナ川地方の諸都市へ転送された。農耕のためにトボリスク地方に止められた比較的少数の流刑者は、タラ (Tara) のような辺境にある耕地の少ない諸都市において耕地に定着させられた。これらの諸都市は一八世紀まで穀物生産量の少ない穀物消費地域であつたから (後出の第三表参照)、流刑はこれらの諸都市においても農耕を形成し得なかつたことがわかる。これらの諸都市の耕地に定着させられた者のうち著しい部分の者は、その地に踏止らずに逃亡してしまつたのである。

以上考察したように、一六世紀末から一七世紀にわたつてロシア政府が試みたところの、欧露の農民を強制的にトボリ

スク地方の耕地へ転住させ、あるいはシベリア流刑者の一部分を耕地開拓に利用しようという二つの方法は、ほとんど顕著な成果をあげなかつたのである。最も効果があつたのは第三の方法、すなわちシベリアへ自発的に移住してきた人々を、陛下の耕地に定着させる方法であつた。これについては、つぎに節を改めて考察することにしよう。

二、自由移住者の流入

まず、一七世紀にシベリア各地で植民地が成立してゆく実情はどうであつたかということ、それはほとんど到る所で同一であつた。すなわち普通、占領したばかりの地方の最も適当な場所に柵 (осгог) が建設され、政府はそこへ地方長官、一―二名の貴族、四〇名ばかりの銃兵、および小役人を置いた。また柵を建設せよという勅令のなかに、しばしば同時に教会の建設が命じられており、帝室の費用で司祭が派遣されたり教会の調度品が送られた。時には政府は都市の植民のため、自由人や流刑者などあらゆる人間を送つてきたが、しかし普通には占領地の確保と開拓とは、そこへ苦難を重ねて到来した自由移住者 (volny narod) によつて行われたものである。新たに建設されたシベリアの柵は、一―二年もたつと、主としてこれらの浮浪者 (gul'yashchie lyudi) からなる蟻塚のような状態となり、到来した浮浪者たちはこの地で租税と町役、住宅建設、畑地の抜根、付近の処女地の開墾などの労働を負担した。こうして創設された中心集落を村 (sloboda, 狭義の村) とよぶのであるが、この中心地からしだいにその周囲の遠近に開墾地 (zaimka) あるいは部落 (derevnya) が発生して、中心地の村のほか部落や開墾地をも含むひろい意味での村 (これも同じく sloboda とよぶ) が発展していつたのである。⁽¹¹⁾

このように、シベリアという新植民地を満たし、その耕地に定着した大部分のロシア人は、シベリアへの自由移住者でありいわゆる浮浪者であつて、かれらの本質は実にヨーロッパ・ロシアからの逃亡者 (beglets) であつた。

ヨーロッパ・ロシアにおいては、一五—一六世紀に商品経済の発展にともない領主直管地が拡大されて、農民からの土地収奪と賦役の強化がおこり農奴制の強化がはじまつていたが、ついに一六四九年になつて、農民は無条件に領主の土地に緊縛されるといふ法律 (Sobornoye ulozhenie) が成立し、それ以後一六世紀半ばにいたるまでの三世紀にわたるロシアの農奴制が確立したのである。ロシアの農民は、農奴体制の強化につれて一六世紀後半から一七世紀にかけて、中部ロシアや北部ロシアから、ウクライナやドン川流域のステップ地方およびヴォルガ川流域などへ、大量に逃亡した。そうして一六世紀末から一七世紀にかけては、一六〇六年のポロトニコフ (I. Polonikov) の暴動や、一六六七年—一六七一年のラージン (S. Radin) の暴動によつて代表されるような、幾多の農民暴動が歐露で繰りかえされたのである。¹²⁾

そのような状態にあつたヨーロッパ・ロシアから、この時代にシベリアおよび沿ウラル地方へ逃亡してきた者は、主として歐露の北部および北東部の、いわゆる「沿海地方 (Pomor'ye)」の住民であつた。その理由は、以前に論述したことがあるように、これらの地方がウラルやシベリアへ比較的近い位置にあり、連水陸路 (volok) によつて連絡されている便利なシベリアへの交通路があつて、シベリア進出の古い伝統をもつ土地であつたことである。¹⁴⁾ しいに強化された農奴制度のもとから逃亡する人達のほかに、この地方でカトリックの分離派 (raskolnik) の運動が高揚し、旧信仰を頑守するものを脅かす死罪から逃亡する人達もあつた。¹³⁾

このように沿海地方からシベリアへ移住する者が多かつたことについて、次に若干の証拠をあげてみよう。まずシュンコフはシベリア諸郡の人口調査書 (perepisnie knigi) のうちから、中部ウラル東麓のイセチ川 (Iset) 沿岸の村と柵について、その住民八七二人の出身地名を一覧表にして掲げている。すなわち一六九五年のカムイシエンスカヤ村 (Kamysheuskaya)、『アラミリスカヤ村 (Aramiskaya)』、『コルチェダンスキー柵 (Kolchedanskyy)』、『カタイスキー柵 (Kataiskyy)』および一六六九年のドルマトフ部落 (Dolmatov) の人口調査書を利用した一覧表であるが、都市数においても出身

者数においてもこの一覽表の中心をなしているのは、疑なく北部ロシアの沿海地方の諸郡である。⁽¹⁶⁾ また、西シベリアの東方に隣接するイエニセイスク地方へ一七世紀に移住したロシア人の出身地に関しては、アレクサンドロフ (V. A. Aleksandrov) が関税帳簿 (tamozhennie knigi) その他の史料に基づいて詳細な論文をかいている。それによると、イエニセイスク地方への移住ロシア人総数のうちで沿海地方出身者の占める比率は、一六二九—一三〇年における約七三%から、一六九〇年—九一年における約九二%の間⁽¹⁷⁾にわたつてゐる。またウスチウゴフ (N. V. Ustyugov) の記載によれば、西シベリアの西方に隣接するウラル西麓のカマ川沿岸にあるソリカムスカヤ (Sol Kamskaya) で製塩業に従事していた労働者は、一六七八年—一六七九年の人口調査書によると、三四七人のうち三一二人 (すなわち全体の九〇%) が北部ロシアの沿海地方からの出身者であつた。⁽¹⁸⁾ カマ川上流のチェルドゥイニ郡 (Cherdyn) などにおいても事情は同様であり、中部ウラル西麓のクングール郡 (Kungur) 成立の基礎が一七世紀前半に形成されたのも、それにつづく一七世紀後半のあいだにクングール郡の農家戸数が約一二倍に増加したのも、主として沿海地方からの逃亡農民が来住したことによるのである。⁽¹⁹⁾ シベリア史に有名な多数のコサックや事業家、たとえばデジュネフ (S. Dezhnev)、ポヤルコフ (V. Poyarkov)、ハハロンフ (Ye. Khabarov)、バラノフ (A. Baranov) などが、沿海地方の出身者であつたことも偶然ではな⁽²⁰⁾。

さて、政府はシベリアへ流入してきた自由移住者を農耕地開拓に利用するために、かれらを陛下の農民 (gosudarevy) すなわち国有耕地農民 (gosudarstvennie krestyane) にした。これらの農民は、自分がチャグロ (tyaglo, 賦課) として承諾しただけの面積の国家のデシヤチナ耕地 (desyatinnaya pashnya) を耕作する賦役義務を負うのであり、この耕地から得られる収穫物はシベリア各地の国庫に収納されて、シベリア各地で勤務している役人や軍人などの給与にあてられた。国家のデシヤチナ耕地におけるこの賦役義務は、封建的地代の最も遅れた労働地代という形態の存在を意味するわけである。シベリアでは一七世紀全体をつうじて、地代のこの形態が卓越をつづけた。農民は賦役義務を負う替わりに、自分が

引受けたチャグロ（賦課）に比例する面積の土地を別に国家から分与地（*nadel*）として与えられ、その生産物は自己と家族との生活を維持するために使用することができた。この分与地すなわち農民の自家用耕地（*sobinaya zapashka*）の大きさは、一七世紀においては制限されていなかつたようであるが、ただ常にそれに比例するチャグロ（賦課）があつて、一般に両者の比率はおよそ四対一から五対一ぐらいになつていた。たとえばデシャチナ耕地の面積が〇・七五デシャチナの場合に、自家用耕地は三デシャチナ与えられるといつた具合である（一デシャチナは約一・一ヘクタール、約一町一段に当る）。シュンコフによると、一七世紀末においてシベリアの総農民数の約八五％は、この国有耕地農民であつた。

政府は移住者に対しては土地を与えるほかに、一定期限の免除（*igola*）、援助（*podnoga*）、および貸付（*sudta*）とよばれる恩典をあたえて、移住者を保護する政策をとつた。免除というのは、新移住者のチャグロ（賦課）を移住後の数年間は免除するものである。免除期間の年数は時と場所によつても、また移住者に与えられる援助や貸付の多少によつても長短があつたが、一般的にいうと早い時代には免除期間が長く六年ぐらいで、それが一七世紀半ば以後になると二―三年に短縮される傾向がみられた。一七世紀後半になつてシベリア移住者数が増大してくると、政府は植民事業の経費を節減するために、免除期間を一年ですませようと努力するようになった。次に援助というのは、移住者の生活を助けるために金銭あるいは現物（食糧、塩、家畜等）を与えるもので、返済の義務はなかつた。貸付もそれと同性質のものであるが、これは返済する義務があつた。強制移住者に対する援助と貸付は普通のものに比較して特に高額であつた。しかし一般に援助も貸付も前述の免除と同様に、一七世紀の後半になると減額の傾向が著しくなり、援助と貸付とは遂に消滅してしまふのである。

シベリア各地の修道院（*monastyrya*）も、移住者に対して右と同様の保護をあたえ、修道院領の耕地に農民の定着をはかつた。一七世紀末にシベリアの修道院および大司教（*mitropolit*）の領地には、シベリアの総農民数の約一四％が定

着していたといつ。⁽²³⁾

さて、ロシア政府は、シベリア征服後一七世紀の前半までは一般にシベリア移住を奨励し保護する政策をとつたが、一七世紀後半になつて欧露からの逃亡者が増大してくると、それを阻止する政策をとらざるを得なくなつた。初期において政府がシベリアへ移住することを期待した者は、欧露の国有地においてチャグロ(賦課)を負っている夫婦以外のその家族の者であつたが、実際には、政府の期待に反してチャグロを放棄してシベリアへ逃亡する者が多く、また私有地農民の逃亡者も多かつたのである。一七世紀におけるロシア中央集権国家の形成に主導的な役割を演じたのは地主的貴族階級(pomestnoye dvoryanstvo)であり、この地主貴族に基盤をもつ当時のロシア政府は、地主の利益を擁護するために、農民の逃亡を禁止せざるを得なかつた。領主の告訴をうけてその逃亡農民を捜索することは、すでに一七世紀の初めから行われていたものようであるが、一六七〇年の勅令では、シベリアへ逃亡した農民を欧露へ送還することを指令して、「すべて沿海地方の逃亡農民は捜索してロシアの諸都市へもどおり送還すべし……そして今後いかなる逃亡者も逃亡農民も受入れてはならぬ」と命令されている。

この勅令は一六八三年にも再確認されており、同年シベリアの地方長官バリヤチンスキー(Baryatinsky)に与えられた勅令には、皇帝の通行許可書なくしては如何なる官等の者もロシアからシベリアへ通行させないように、大ペルミ(Perm Velikaya)——カマ川の上流地方のこと、チェルドゥイニ、ソリカムスカヤその他の地に強力な関所を設けることを命じ、関所に現われた者は、その前住地へ送還すべきことを命じている。しかし欧露からシベリアへの逃亡は依然として続いたので、政府は一六八八年にもまた、沿海地方からシベリアへ農民を通過させないようにし逃亡者は欧露へ送還せよという勅令を、再確認せざるを得なかつた。⁽²⁴⁾

逃亡農民の阻止と送還に対するロシア政府の立場は、苦しい矛盾したものであつた。一方においては、地主や世襲領主

の告訴によつて搜索をうけ実際に送還された逃亡農民もあつたが、他方では、歐露の国有地農民 (chemososhnie kres-tyane) であつてチャグロ (賦課) を放棄してシベリアへ逃亡した者とか、シベリアへ逃亡しても国有耕地農民になつたり国家の勤務者に採用されたりした者については、ただそれらの者の目録を作製してモスクワのシベリア省へ提出することがトボリスクの地方長官に命じられただけで、実際に欧露へ送還されることはほとんどなかつたようである。その理由は、国有地農民は、私有地農民が一六四九年の法律 (uklozenie) によつて土地に緊縛されたのに比較すると、比較的自由の自由を保持していたからでもあり、またシベリアへ逃亡しても再びシベリアで国有耕地農民となつてチャグロ (賦課) を負うわけであり、新領土シベリアの植民にも役立つので、国家としては実質的な損失がないからでもある。そのような理由から、逃亡農民に対して見て見ぬふりをするような政府の態度が生れるのであり、一七一九年の元老院 (Senat) の訓令のように、逃亡農民のシベリア定着を既成事実として公認するような態度が出てくるのである。そうかと思ふと、一七二七年の勅令では、「逃亡は禁止せらる、逃亡者を搜索するため関所が設けられ、逃亡者はこれを捕縛し、主犯者ならびに教唆者はこれを死罪に処すべしと命ぜり」と、全国民に布告するような表面的には厳しい態度も示されたのであつた。しかし一八世紀にも逃亡は依然としてつづき、送還は廢止されもせず、ほとんど実行されもせず、何の効果もなかつた。ついに一七六三年に元老院は上奏して、送還が実際には何の効果もない状態であることを指摘し、「逃亡者を登録して人頭税を課するように、また世襲領主には逃亡者を新補充員に算入するように」命じたが、既成事実を承認する元老院のこの考えは、女帝の裁可をへて法律となつたのである。²⁵⁾

このようにして、逃亡農民の自由な移住をとくとき禁止しながら、そしてそれに違反する既成事実を承認しながら、一七世紀および一八世紀におけるシベリアへの自由移住に対する政府の干渉の歴史が経過した。ロシア政府のシベリア移住に対する立場は矛盾したものであり、逃亡者の自由なシベリア移住は実際には特別に強く圧迫されたものとは言えず、む

しろ黙過されたというのが実情であつた。

こうして欧露からウラル山脈を越えて流入する多数の逃亡者を迎えながら、一七世紀のあいだに、シベリア在住のロシア人の人口はどのように増加したか、それを統計的数字で示すことは困難である。しかしスロフツォフ (P. Slovtsov) によると、シベリアの総人口のうちでロシア人とその他のものを合わせた移住者の数は、男女合計して一六二二年に二万三、〇〇〇人、一六六二年に一〇万五、〇〇〇人、一七〇九年に約二三十万人とされている。⁽²⁶⁾ またシュンコフがブツィンスキー (P. Butinsky) その他に基づいて記載しているところによると、一六四五年および一六九九年における農家の戸数は、トゥリンスク郡ではそれぞれ二三八戸と六一戸、チュメニ郡では一一五戸と七一七戸、トボリスク郡では一四九戸と四、四〇三戸であつた。これらの数字は、一七世紀後半におけるシベリア移住者の急激な増加速度を、明瞭に物語っているのである。そうして、一七世紀におけるシベリア開拓の成果を一言で表現するならば、一七世紀末には、シベリアの総耕地面積は三圃として計算して約一〇万デシヤチナに達したのであつた。⁽²⁷⁾

三、ヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の開拓

前節までに論述してきたような、ロシア政府のシベリア植民事業と自由移住者の流入定着とによつて、西シベリア各地の農耕地は実際にどのように開拓されたのであろうか。本節と次節とにおいては、西シベリアの土地を西部のヴェルホトゥリエ・トボリスク地域と、東部を占めるトムスク・クズネツク地域とに二分し、これら東西それぞれの地域について、一七世紀に如何に植民地が建設され農耕地が拡張されていつたかを、シュンコフ (V. I. Shunkov) とボヤルシノワ (Z. Y. Boyashinova) との業績を参照しつつ考察することにする。

まず、西シベリアの西部の諸郡を一括するヴェルホトゥリエ・トボリスク地域のなかには、行政上のヴェルホトゥリエ

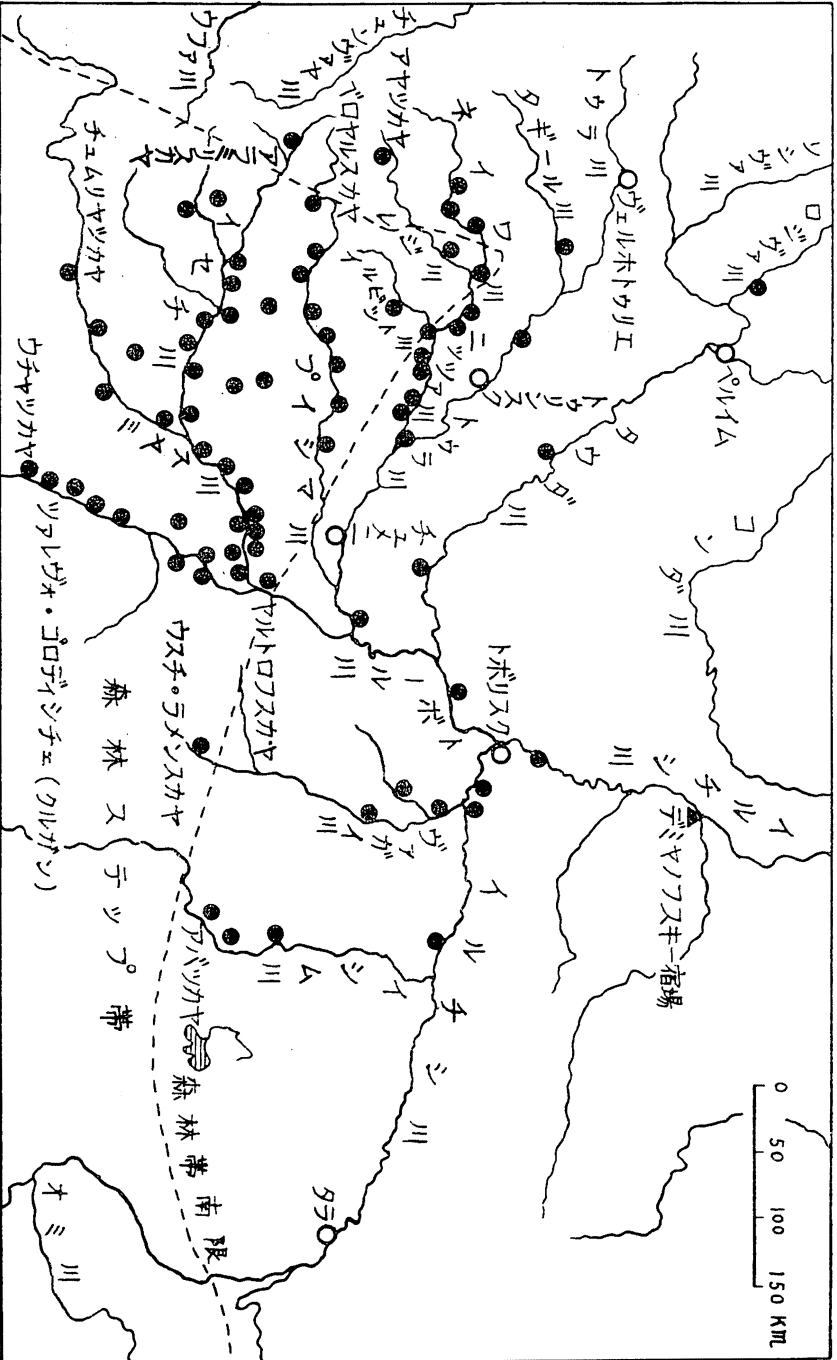
那 (Verkhourye) / チュメニ那 (Tyumen) / トゥリンヌク那 (Turinsk) / トボリスク那 (Tobolsk) / ペルイム那 (Pelym) / タラ那 (Tara) をふくめる。この地域は、欧露からシベリアへはいる入口に位置する地域で、最も早く征服され、したがってロシア人による植民と農地開拓もシベリアで最も古い地方である。移住者の定着数もシベリアのうちで最も多かつた。上記の諸那のうちで最後のペルイム那とタラ那においては、一七世紀中にはあまり耕地が開墾されなかつたが、初めの四那においては一七世紀のあいだに著しい面積の農業地域が形成されたのであり、一七世紀末から一八世紀初めにかけては、全シベリアの農業従事者の七五%がこの地域に集中し、この時代におけるシベリアの主要な穀倉地域となつたのである。

さて、シベリアにおいて最も早く開墾されたのは、軍事的・行政的および経済的中心としてシベリア各地に建設された諸都市および柵の附近の土地である。しかるにロシア人の初期のシベリア進出が、他の拙論でものべたように西シベリアの北部から行われたこと、また初期のロシア人の進出が森林帯の毛皮獣を獲得する目的であつたことや、西シベリアの主要な交通路となつたオビ川が、ロシア人の東進を西シベリア森林帯のなかをかなり北方で導いたことなどの事情によつて、初期の西シベリアのロシア人都市や柵の位置は、後代に比較するとかなり北方にあり、オビ川下流域のオブドルスク (Obdorsk) / ベリョゾフ (Beryozov) / スルグート (Surgut) / タズ川 (Taz) 畔のマンガゼヤ (Mangazeya) など、自然的条件がこの時代に農耕を許さなかつた土地にさえも、都市や柵が建設されたのであつた。そのうえ西シベリア原住民の農業も当時あまり発達していなかつたので、シベリアへ進出したロシア人にとつて、穀物の補給ということは、本稿の初めにものべたようにシベリア征服の初期から重要な問題となつたわけである。

シベリアで最初に建設されたロシア人の都市チュメニ (一五八六年建設) には、プツィンスキー (P. Butinsky) の記載によると、すでに一五九五年には国有耕地農民がいたということであり、ここはトゥラ川 (Tura) 畔における最初の

第1図 ゼェルホトウリエ・トボリスク地域の村の分布 (17世紀)

(V. I. Shunkov, S. U. Remezov, G. F. Miller, L. S. Berg による)



ロシア人の農業移住地であつた（第一図参照）。トゥラ川上流に一五九八年に建設されたヴェルホトゥリエにも、たちまち農民が移住した。またトゥリンスク（一六〇〇年あるいは一六〇一年に建設）の建設命令には、直ちにそこへ駅通志願者五〇人と耕作者一〇〇人を送るよう指令されていたという。こうしてチュメニ、ヴェルホトゥリエ、トゥリンスクの耕作者は、トゥラ川畔におけるロシア人農業の基礎をおいたのである。⁽²⁸⁾

トゥラ川流域以外の地方ではどのような状態であつたかというところ、もう少し北方のタウダ川（Tavda）は、前述のヴェルホトゥリエ公道ができるまでの、シベリアへ行くウラル山脈横断の主要交通路に当つており、その上流に一五九三年にペルイムが建設されるときには、農民も送られた。またイルチシ川（Irtysh）をさかのぼつてステップ帯との境界に、一五九四年にタラの町が建設された時には、この地における耕地開拓が指令されている。またトボリスク附近のイルチシ川とトボル川との流域に、ロシア人の農業が開始されたのも一六世紀末のことと思われる。⁽³⁰⁾

しかしタウダ川はあまりに北方に位置しているため、その流域の自然的条件は農耕に適しておらず、この川筋はロシア人農業の北方限界となつていた。そのうえ一六世紀末になるとシベリアへの主要交通路がタウダ川を離れて南方のトゥラ川へ移つてしまい、タウダ川流域には二―三の部落が出現しただけで部落は増加せず、ここにはロシア人農業はあまり発展しなかつたのである。トボリスク附近の農業も、やはり自然的条件に恵まれないためにあまり発展せず、穀物の補給はもつと南方のトゥリンスク郡やチュメニ郡に依存していたようである。⁽³¹⁾ またイルチシ川畔のタラは辺境の町であり、常に南方ステップ帯の遊牧民から襲撃をうける危険があつて、この地域の農業も一七世紀にはあまり発展しなかつた。一七世紀全体を通じて、タラ郡はペルイム郡とともに最も耕地の少ない郡であり、勤務者でありながら農耕に従事した者を別にすると、タラ郡の国有耕地農民の戸数は一七世紀の半ばに全部で僅か二九戸しかなく、一七世紀末になつても八八戸にすぎなかつた。⁽³²⁾

しかるに以上の諸地域とは異なつて、前述のように一六世紀にトゥラ川畔に開始されたロシア人の農業は、その後急速に発展したのである。トゥラ川は欧露からウラル山脈を越えてシベリアへはいる主要な交通路に當つていたので、この水系の流域にはロシアからの移住者数も多く、またこの地域はタウダ川より南方に位置して自然的条件も比較的農耕に適していた。シェンロフによると、トゥラ川沿岸には、一六三九年にブラゴヴェシチェンスカヤ村 (Blagoveshchenskaya sloboda)、『一六四二年にポクロフスカヤ村 (Pokrovskaya)』その後にはトゥリンスカヤ村 (Turinskaya) が発生した。またトゥラ川の諸支流の沿岸にも、多数の村が建設された。最も早く一六一二年に、トゥラ川の支流タギール川畔に、タギーリスカヤ村 (Tagiskaya) ができた。トゥラ川の支流ニツツァ川 (Nisa) 畔には、一六二〇年代、三〇年代、および四〇年代の前半に、多数の村が発生した。すなわちルドナヤ村 (Rudnaya)、『ニツィンスカヤ・オシチェプロヴァ村 (Nitsinskaya-Oshchepkova)』キルギンスカヤ村 (Kirginskaya)、『チェムブロフスカヤ村 (Chubarovskaya)』ヴェルフネニツィンスカヤ村 (Verkhneitsinskaya)、『ニジネニツィンスカヤ村 (Nizhneitsinskaya)』ウスチ・ニツィンスカヤ村 (Ust-Nisinskaya) がある。同様にまたニツツァ川の支流ネイワ川 (Neiva) の沿岸には、クラスノポリスカヤ村 (Krasnopolskaya)、『アルジンスカヤ村 (Murzinskaya)』ネヴィヤンスカヤ村 (Nevyanskaya)、『ノヴァヤ・ネヴィヤンスカヤ村 (Novaya Nevyanskaya)』が發生し、『レシ川 (Rezh) 畔にはアラシエフスカヤ村 (Aramashevskaya)』が、またイルビット川畔にはイルビットスカヤ村 (Irbitskaya)、『ベロスルーツスカヤ村 (Belosludskaya)』が発生した。これらの村々とそのほか多数の部落とは、一六三〇年代および四〇年代のころには、すでにヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の主要な農業中心地となつていた。⁽⁸⁸⁾

これらの村々や部落の發生に關連して指摘できる注目すべき事實は、農耕地の重心がしだいに南方へ移動したことである。北方のタウダ川やトボリスク地域の農耕も維持されてはいたが、上述のニツツァ川畔の開拓村の位置はヴェルホトゥ

リエヤトウリンスクよりは南方にあり、移住農民はすでにトゥラ川本流に沿う歐露からシベリアへの主要交通路から外れて、より一層農耕に適した南部に入植する傾向を示しはじめたのである。この傾向は一六四〇年代から一七世紀後半へかけて、一層明瞭となつてきた。シュンコフによると、この時代には、トゥラ川の最も南方の支流であるプイシマ川 (Pshma) 流域に村々が現われた。一七世紀半ばには、それより南方のイセチ川 (Iset) 流域にイセツキー柵 (Isesky) の建設をはじめとして村々の建設が開始され、イセチ川の南支流ミヤス川 (Miyas, Miss) 沿岸にも三カ村が出現した。それと同時にトボール川沿岸でも、その支流トゥラ川が流入する川口より南方の沿岸に植民がおこなわれた。この方面では一六三九年にヤルトロフスク柵 (Yalutorovsk) が建設されたが、この柵はまだこの地域における安全な村の発生を保証することができず、ヤルトロフスカヤ村が建設されたのは二〇年後の一六五九年であつた。それより上流のトボール川沿岸に一六六三年に、ツアレヴォ・ゴロディシチェ (Tsarevo-Gorodishche) —— 後代のクルガン (Kurgan) —— が建設されると、その後この柵と下流のヤルトロフスク柵とのあいだのトボール川沿岸に、一〇カ村以上の村々が建設された。このようにして、プイシマ川、イセチ川とミヤス川、およびトボール川の沿岸に五〇以上の村が発生したことは、一七世紀のシベリアにおける最も農業化した地域というこの地域の名声を一層高める結果となり、同時にこれは、農耕適地である一層南方の土地へ農業が移動したことを意味する事実でもあつた。³⁴⁾

農業開拓地の南進という事実は、トボリスクより上流でイルチシ川へ南方から流入するヴァガイ川 (Vagay) とイシム川 (Ishim) との沿岸でもみられた。シュンコフによると、ヴァガイ川畔にはすでに一七世紀前半に、帝室領の部落とか勤務者や修道院の部落ができていたが、一六六九年にはヴァガイ川の支流アシルク川 (Ashlyk) 畔にアシルクカヤ村 (Ashlyskaya) が建設され、その後ヴァガイ川の上流にウスチ・ラメンスカヤ村 (Ust-Lamenskaya) ができた。またイシム川の沿岸にはオルロヴォ・ゴロディシチェ村 (Orlovo gorodishche) 、コルキナ村 (Korkina) およびアバツカヤ村 (Abatskaya) が現われた。以上のようにこの方面においても一七世紀後半になると、早く一六世紀末にトボリスク附近

に発生した古い耕地よりずっと南方へ、農耕地開拓地が進出していたのである。⁽³⁵⁾

しかし、この耕作地の南進ということは、自然の諸条件が南方ほど一層農耕に適しているという事情によつて促進されたにしても、ロシア人開拓地の南縁部は、その南方の遊牧民から攻撃されるため進出は容易ではなかつた。ロシア人によつて南方の草原帯へ駆逐されたクチュウム汗 (Kuchum) の子孫の遊牧民は、一七世紀を通じて絶えず南方のステップ帯からロシア人の開拓村を攻撃しつづけたのである。かくて西シベリアにおけるロシア人の農耕地開拓地の南進は、一八世紀の初期において、西方のウラル山地から東方へ、ミヤス (Mias) —— ツァレヴォ・ゴロディシチェ (後代のクルガン) —— ヴァガイ川上流 —— アバツカヤ村 (イシム川畔) を結ぶ線で停止した。⁽³⁶⁾

このようにして一七世紀末になると、西シベリア西部のヴェルホトゥリエ・トボリスク地域には、かなり広大な農耕地帯が形成されるにいたつたのである。いまシュンコフの記述しているこの農耕地帯の北方限界をみると、タウダ川では、その沿岸にまばらなロシア人の住地、すなわちガリンスカヤ (Garinskaya)、『ペルム』、タバリンズカヤ (Tabarinskaya)、『スクレムスキー・ポゴスト (Suklensky pogost)』があるだけで、この川の上流へはそれ以上発展しなかつた。またイルチシ川流域では、オビ川との合流点から少し上流のサマロフスキー宿場 (Samarovsky yam) にも、その上流のデミヤノフスキー宿場 (Demyanovsky yam) にも、国有耕地農民は居住していなかつた。トボリスクより下流に農耕地を確立しようという根気強い努力にもかかわらず、当時それは成功しなかつた。⁽³⁷⁾

さらに、シュンコフの記述している農耕地帯の南方限界を西方からみると、それはチュソヴァヤ川の上流のチュソフスカヤ村 (Chusovskaya) およびスレムスカヤ村 (Sulenskaya) から、マヤト湖 (Ayat)、『およびイセチ川とミヤス川との上流域のマヤトスカヤ村 (Ayatskaya)』、『アラミンスカヤ村 (Araminskaya)』、『ベロヤルスカヤ村 (Beloyarskaya)』、『チュムリヤツカヤ村 (Chumlyarskaya)』にいたり、トボール川の中流部のウチャツカヤ村 (Uyarskaya)、『ヴァガイ川の上流部の

ウスチ・ラメンスカヤ村 (Ust-Lamenskaya)、イシム川畔のアバツカヤ村をへて、イルチシ川沿岸のタラに達していた。このように農耕地帯の南方限界は、すでに西シベリア南部の森林帯を出て、その南方の森林ステップ帯へ進出していたのである。しかしこの時代にはまだ、ハネガヤ草のステップ帯 (koyunje stepi) へは進出してゐなかつた。⁽³⁸⁾

以上のような、一六世紀末から一七世紀中を通じてのロシア人の西シベリア開拓によつて、西シベリアの耕地面積は拡張され、農耕従事者の人口は増大した。シュニコフによると、ヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の農家総数は、一八世紀の初めに八、二八〇戸であつたが、そのほか一七世紀末にはトボリスクの勤務者一、二〇〇人以上が耕作に従事していたし、商工民 (posadskie lyudi) の一部分も農業を行なつていた。したがつて、ヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の⁽³⁹⁾一七世紀における農業従事者は、一万戸を越えるという顕著な数に達したのである。

次には西シベリアで開拓された耕地面積の問題であるが、これらの農業従事者たちによつて耕作されていた耕地の面積に関しては、十分な資料が残つていないので、今日となつては推算する以外に方法はないようである。以下しばらく、シュニコフが推算した方法とその結果とについて略記することしよう。

まず、耕地面積を推算するのが一番容易なのは国有耕地農民の播種地面積である。第一表において、各郡の国有耕地農民 (gosudarstvennie pashennie krestyane) の戸数と、かれらが耕作してゐた国家のデシヤチナ耕地 (desyatinnaya pashnya) の面積とを、一六八九—一六九九年の「シベリア諸都市一覽 (Vedomosti sibirskikh gorodov)」とこの資料から得られた数値である。また国有耕地農民が、かれらの生活を維持するために耕作する自家用耕地 (sobinnaya zapashka) の面積は推算された数値であり、それは実際に一、一四八戸の自家用耕地面積の平均が二戸当り一圃で二・二デシヤチナ(一デシヤチナは約一・一ヘクタール、約一町一段)であつたという事実を基礎として、全体の面積を推算したものである。この自家用耕地面積とデシヤチナ耕地面積とを加算して得られる国有耕地農民の播種地総面積は、一圃で一

第1表 国有耕地農民の1圃の播種地面積

(單位デシヤチナ)

郡名	農家戸数	国家のデシヤチナ耕地面積	自家用耕地面積	国有耕地農民の總播種地面積
トボリスク	3 526	1 436	7 757	9 193
ヴェルホトゥリエ	1 151	385	2 532	2 917
トゥリンスク	553	206	1 216	1 422
チュメニ	370	204	814	1 018
タラ	88	39	193	232
ペルイム	54	52	118	170
計	5 742	2 322	12 630	14 952

一七世紀西シベリアの植民と農耕地開拓 (三上)

一一〇

四、九五二デシヤチナとなる。そのほか国有地小作農民 (gosudarstvennie obrochnie krestyane) や修道院の農民、ならびにトボリスクにあつたシベリア大司教庁 (Sibirsky mitropolitichy dom) の農民などに關しても、同様にして推算される。⁽⁹⁾

また、この地域の俸給生活者 (zhalovannye lyudi) すなわち勤務者 (sluzhbie lyudi) は一七〇〇年に總数五、五〇八人のうちで、その約四分の一に當る一、二〇三人が農耕に従事していた。そして勤務者の身分でありながら農耕に従事していた者の播種地面積は、一圃で一人当たり平均二・三デシヤチナであるという事実を基礎にして、勤務者の總耕地面積が推算される。また商工民 (posadskie lyudi) の總数は一、二二五人で、そのうち數百人の者が耕作に従事していたとみられるので、商工民の總耕作面積は約一、〇〇〇デシヤチナと推算される。そのほかロシア人以外では、ブハラ人 (Bukhartsy) の耕地が三二八デシヤチナ、タタール族 (Tatar) の耕地が一、三五四デシヤチナとみられ、ヴォグル族 (Vogul, 現在のマンシ族 Mansi) の耕地面積は非常に小さく無視してよい程度であつた。以上のような推算方法によつてシュンコフは、一七世紀末のヴェルホトゥリエ・トボリスク地域における各種の農耕従事者の播種面積に關し、一圃で計算して

第2表 17世紀末ヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の1圃の耕地面積

(単位デシヤチナ)

国有耕地農民の播種地面積	14,952
国有地小作農民の ”	2,557
大司教庁および修道院の農民の ”	3,927
俸給生活者(勤務者)の ”	2,767
商工民の ”	1,000
タタール族とヴォグル族との ”	1,354
ブハラ人の ”	328
計	26,885

第二表のような結果を得たのである。⁽⁴¹⁾

さて以上の計算は、すべて一圃としての播種地面積である。ロシア人以外の諸民族の農法は、三圃農法 (tryokpolnye) ではなかつたと考えられるが、西シベリアのロシア人の農法は一七世紀末には大体三圃農法であつたと思われる。それゆえ、一七世紀末におけるヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の総耕地面積は、上記のロシア人の耕地面積を三倍した数値に、ロシア人以外の耕地面積をそのまま加算した七七、二九一デシヤチナとなる。ロシア人の耕地面積は、この地域の総耕地面積の九七%以上を占めたわけである。⁽⁴²⁾

最後に、ヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の穀物総収穫量と需給関係の問題である。この地域の全耕地から収穫された穀物の総量を決定することもまた、一七世紀の史料が残っていないので、近似的にもはなはだ困難である。しかしシュンコフが種々の仮定や条件のもとに推算したところでは、この地域の一七世紀末における穀物の総収穫量は三〇万チエーチ (che) —— 一チエーチは約二〇九・二リットル —— を越え、この地域の住民の穀物需要を満足したばかりでなく、余剰穀物さえ生じたのであり、北部ロシアの沿海地方からシベリアへ送られていた備蓄穀物 (sozhnie zapasy) の移入は一七世紀末(一六八五年)に廃止された。一八世紀の初期に、この地域の農民(国有耕地農民および

第3表 シベリア諸郡の国庫穀物の収支—1701年 (単位チェーチ)

郡名	収入量	支出量	余剰量	不足量	不足量の補充先
トボリスク	13 917	38 668	—	24 751	トボリスク地方の上流の諸都市から
チュメニ	4 736	3 485	1 251	—	
ヴェルホトゥリエ	9 188	7 003	2 185	—	
トゥリンスク	4 735	2 927	1 808	—	同上〔ママ〕
ベルイム	651	390	261	—	
タラ	433	3 389	—	2 956	同上
トムスク	5 940	7 095	—	1 155	
クズネツク	373	3 015	—	2 642	
イエニセイスク	3 908	3 258	650	—	
クラスノヤルスク	840	3 287	—	2 447	イエニセイスクから
イリムスキー	1 967	1 291	676	—	
イルクーツク	2 752	3 906	—	1 154	
ヤクーツク	430	5 514	—	5 084	
ネルチンスク	234	1 244	—	1 010	
ナルイム	182	297	—	115	
ケトスク (註)	187	216	—	38	
スルグート	—	1 201	—	1 201	トボリスクから
マンガゼヤ	25	997	—	972	トボリスクとイエニセイスクから
ベリョゾフ	—	2 171	—	2 171	トボリスクから
計	50 489	89 354	6 831	45 696	

(原文註) 1701年の一覧表にはケトスクを欠く。表中の数値は、ケトスク柵の1703年の予算書 (smetny spisok) よりとる。

国有地小作民)が供出する穀物は、政府が西シベリアの俸給生活者に支給する穀物給料 (khlebie oklady) の必要量を著しく超過したので、政府はその余剰穀物をシベリアの北方および東方の勤務者に送ることができたし、同時にまたこの地域の穀物は、すでに發展しつつあつた市場取引によつても、シベリア東部へ送られたのであつた。⁴³⁾

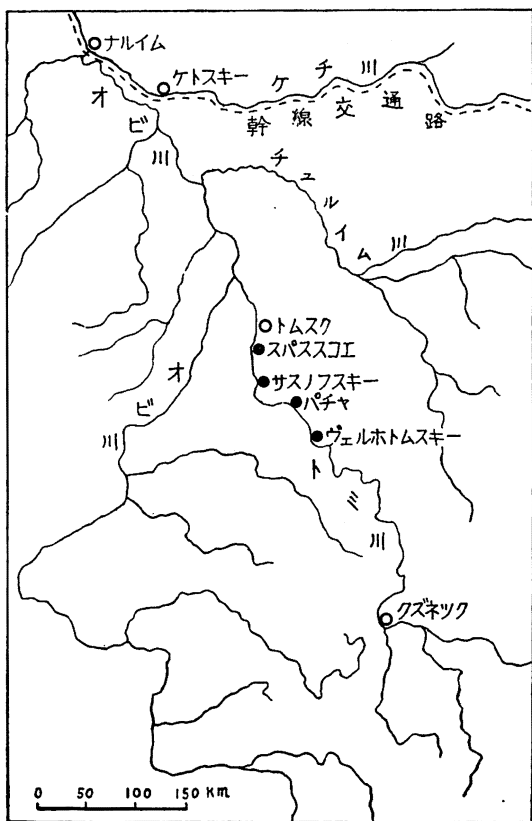
なおオビ川の中流域のナルイム (Naryn) では、一六三〇年代より遅くない時代に國家のデシヤチナ耕地が開始され、オビ川沿岸における農耕の飛地となつていたといふことであるが、それは小規模のもので穀物の自給はできず、勤務者に必要な穀物はトボリスクから送られ、またナルイムの住民は普通トムスクで穀物を購入していたといふ。ケトスク (Ketsk) でも一七世紀後半には農業が行われたが、ここでも穀物の自給はできず、一七世紀末および一八世紀にもなお、トボリスクから穀物が輸送され、またトムスクにおいても購入されていたといふことである。⁴⁴⁾

第三表は、シュンコフが一七〇一年の「シベリア諸都市一覽」から作製した、シベリア諸郡における國庫穀物の収支状況をしめす表である。⁴⁵⁾ この表のトボリスク郡の支出量は異常で、この数値のなかには他地方へ転送するものを含むことはほぼ確実であり、多分過去の債務をも含むものであろう。トボリスク郡の普通の支出量は、約一八、〇〇〇チェーチである。⁴⁶⁾ この一覽表によつて、西シベリア西部のヴェルホトゥリエ・トボリスク地域がシベリアにおける國庫穀物の主要な生産地であること、また北部シベリアや東シベリアの諸郡では國庫穀物が不足していることなどの状況が判明する。シベリア全体で不足する國庫穀物の量は、収支差引して三万八、八六五チェーチとなるが、この程度の穀物量は、政府がシベリアで購入して補足するものと考えられる。

四、トムスク・クズネツク地域の開拓

前述のヴェルホトゥリエ・トボリスク地域の東方に隣接して、西シベリアの東部を構成していたのは、トムスク郡とク

第2図 トムスク・クズネツク地域 (17世紀)



ズネツク郡との地域であった。この地域は比較的早くロシア人に征服されて、トムスク (Tomsk) はすでに一六〇四年に、またクズネツク (Kuznetsk) は一六一八年に建設されたにかわらず、この地域は西シベリアを横断する一七世紀の主要交通路 (ナルイム—ケチ川—マコフスキー—連水陸路—イェニセイスク) から外れた位置にあつたためと (第二図参照)。

南方から異民族の襲撃をうける危険のある辺境であつたために、ここにはロシア人移住民の定着する者が少なく、この地域内の農業は一七世紀中を通じてあまり強力な成長をとげなかつた。

まず、トムスク郡の考察から始めることにする。トムスク方面のタタール族その他の土着民には発達した農業がなかつたので、トムスク郡に農耕地を開拓する計画は、ロシア人によつてトムスクの町が建設される当初からあつた。すなわちボヤルシノフ (Z. Ya. Boyarshinova) の研究によると、一六〇四年にトムスク建設のために、ピセムスキー (G. I. Pisenksky) とトゥイルコフ (V. F. Tyrkov) とを隊長とする部隊が派遣されたときのボリス・ゴドゥノフ帝 (Boris F.

Godunov) の命令書のなかには、町の建設と同時に「陛下の耕地 (gosudaravaya pashnya)」をつくる適当な土地を探ること、その耕作のために勤務者の一部を配分すること、土着民から耕作用の馬を国費で購入すること、勤務者たちも食糧を自給するために自家用の耕地を開拓すること、などを命じており、そのうえ種子用として多量のライ麦、燕麦および大麦の種子がトムスクへ送られたようである⁽⁴⁷⁾。

しかしポヤルシノフは、この一六〇四年の命令による耕地の開拓は、実行できなかつたものと推察している。その証拠となる史料は翌一六〇五年のヴェルホトゥリエの地方長官プレシチェエフ (N. O. Plescheyev) 宛ての勅令であり、それには前年スルグートで、予定された五〇人のうち僅か五人しか集められなかつたことを述べ、それで新たにヴェルホトゥリエで「浮浪の希望者 (gulyashchie okhochie lyudi)」五〇人を徵募し、貨幣と穀物とを給付してトムスクへ送ることを指令している。この命令がどのように実行されたかを物語る直接の史料はないが、翌一六〇六年のルジェフスキー (M. M. Rzhewsky) とバルチェネフ (S. Bartenev) 宛ての勅令では、トムスクの耕地を増加せよと命令されているので、すでに前年の一六〇五年には、トムスク附近にロシア人の耕地が開拓されていたことが推測されるのである。しかし多分その耕地は小規模なものであつたから、政府はそれを増大することを命じたのであり、そのために、当時シベリアへ補給する穀物を供出していた北部ロシアのペルミ、ヴィヤトカ、ソリウイチェゴドスクの地方から、「希望者」を徵募するように指令したのが一六〇六年の勅令であるとポヤルシノフは解釈している。トムスクの勤務者にも耕作させよという前の指令も、この勅令のなかに再び繰り返えされている。さらに、一六一四年のトムスクの銃兵とコサックとの皇帝あての嘆願書 (chelobitnaya) には、キルギス族 (Kirgizy) その他の土着民がトムスクの町を襲撃して、「畑の陛下の穀物やコサックの穀物を焼いたり踏み荒したりした」と述べられているので、トムスク附近における農耕地の存在は明瞭である。このようにして、トムスクが建設されて以後一〇年間に、この地に陛下の耕地と勤務者の耕地との基礎がおかれたの

であつた。⁴⁸⁾

しかしトムスク附近に開拓された陛下の耕地(国家のデシャチナ耕地)は、労働力が不足で、その規模は大きいものではなかつた。それゆゑ政府はトムスク附近にある陛下の耕地を耕作させるために、流刑者や強制移住民を送つた。すでに一六〇八年に「失寵の罰 (Opala)」で三五人が送られ、その後にも失寵の人々やリトワニア人の捕虜や、ロシアの囚人などが護送されている。「陛下の命令 (po gosudarevu ukazu)」によつても農民が送られたが、農民は強制的な移住を好まず、逃亡する者などもあつて、計画された人数に達しなかつた。トムスクの地方長官は、自由移住者のうちから、陛下の耕地を耕作する農民を募集することも行なつた。このような各種の努力の結果、一七世紀にトムスク郡で陛下の耕地の耕作に従事した農民数は、次のように増加した。すなわち国有耕地農民の世帯数 (Yraglo) は、一六二六年——七六世帯、一六三二年——九二世帯、一六四一年——九九世帯、一六四六年——八九世帯、一六六一年——二九世帯、一七〇三年——三四三世帯となつたのである。⁴⁹⁾

さて次には、このようにして開拓されたトムスク郡の農耕地面積に関する問題である。まず国有のデシャチナ耕地の面積から考察しよう。「陛下の耕地」は、初めはトムスクの町の附近にただ一カ所であつたが、一六二〇年代にトムスク南方一五——一八キロメートルのスパスコエ村 (Spaskoye selo) 附近に、第二の耕地ができた。さらに一六五六年から、トムスク南方五〇——六〇キロメートルにあるトミ川上流のサスノフスキー柵 (Sosnovsky) 附近に、第三の耕地が開拓された。ポヤルシノワによると、一六二三年から一六七二年の間における陛下の耕地の状態は、第四表のようであつた。⁵⁰⁾

また、トムスクには一六二〇年代にアレクセーエフ修道院 (Aleksseyevsky monastyr) が建設されていた。この修道院は、トムスクより上流のトミ川沿岸の村や部落、すなわちパチャ村 (Pacha)、イスキチム部落 (Iskitim)、レビヤシヤ部

第4表 トムスク郡の陸下の耕地の播種地総面積と収穫量

年次	播種面積 (単位デシヤチナ)		収穫量 (単位チェーテ)	
	ライ麦	燕 麦	ライ麦	燕 麦
1623	91 ½	82 ½	654	695
1624	76 ½	81 ½	836	584
1625	資料なし	80 ½	520	1028
1626	76 ½	81 ½	540	1247
1661	91	93	856	943
1665	85	85	1144	1053
1666	83	83	資料	なし
1672	100 ½	100 ½	1075	1732

一七世紀西シベリアの植民と農耕地開拓 (三上)

落 (Lebyazhya) などを領有し、トムスクより下流でも一六五三年以来イシタン部落 (Ishlan) などを領有して、修道院に隷属する農民に耕作させていた⁽⁵¹⁾。

このようにして開拓された国有耕地と修道院領との一八世紀初めの状況は、シュニコフによると次のようであつた。すなわち予算摘要簿 (perchnevaya vypiska) によると、一七〇六年にトムスク郡の陸下の農民は三三四戸であり、農民名簿 (imyanaya krestyanskaya kniga) によると国有のデシヤチナ耕地の面積は一〇二デシヤチナである。そのほかに、流刑者で国家のデシヤチナ耕地を耕作する代わりに脱穀した穀物 (ostynoy khleb) を納入した者が一六七人あつて、両者合わせて一七〇六年における農民の総戸数は五〇一戸であり、その自家用耕地の面積は、一戸当り一・八デシヤチナとして推算され、九〇一デシヤチナとなる。なお一七〇三年の人口調査書によると、トムスクのアレクセーエフ修道院の農民は四七戸で、かれらは自家用耕地一一一デシヤチナを耕作していた。この修道院には農民の耕地のほかに、修道院の播種地二〇デシヤチナがあつた。⁽⁵²⁾

上にのべた国有耕地農民や修道院の農民のほかに、トムスク郡に

は小作民 (obrochnie lyudi) が、一七〇三年に一圃として七デシヤチナの畑を耕作していた。また商工民 (posadskie lyudi) も、手工業と商業のみならず、農業にも従事しており、一七〇三年には二三五戸の商工業者がいて、一圃としての耕地面積四七八デシヤチナを耕作していた。⁽⁸³⁾

以上のほか、トムスク郡の勤務者 (sluzhnie lyudi) の一部分もまた、穀物耕作に従事していた。ポヤルシノワによれば、一六三七年に勤務者の播種地面積に関する調査が行われたが、その資料によると、勤務者の総数七九八人のうちで自分の耕地を所有する者は一五六人(全体の約二〇%弱)であった。しかるに一七世紀後半における勤務者の貴族 (diti boyarskie)、騎兵コサック (konnie kazaki) および歩兵コサック (peshie kazaki) の総数と、そのうちで穀物給料の代わりに土地を耕作していた勤務者 (sluzhat s pashni) の人数は、第五表のようであった。すなわち、一七世紀初期(一六三七年)には全体の約二〇%であった耕作勤務者の比率は、一七世紀末(一六九九年)になると、勤務者総数の約四〇%弱に増大したのである。勤務者を農業従事へ駆りたてた動機はいろいろであったが、一般に普通のコサック(歩兵と一部分の騎兵)は、穀物で支給される給料額が少なく、また穀物給料の支給が不規則であった関係から、必要な食糧を得るために農業に従事した。それに反して上層の富裕なコサック(貴族、頭領 golovy、五十人長 pyatidesyatkiki、騎兵コサック)は、穀物や穀粉を販売して利益を得るために耕地を開拓するものもあつた。⁽⁸⁴⁾

シュンコフは穀物予算簿 (kholebaya sneta) によつて、トムスク郡の勤務者と銃兵との人数として、一七〇五年には一、〇五三人、一七〇六年には一、〇九〇人という数字を掲げ、また一七〇三年の人口調査書によつて、同年における勤務者の耕地面積は、一圃として一、八一五デシヤチナであつたとしている。このほかに退役者や、また勤務者の子供でまだ兵役に徵募されていないが独立の農家として生活している者、などの合計四六九人の耕地面積八三〇デシヤチナがあつた。それゆえトムスク郡の勤務者関係の耕地面積は、兵役に徵募されている者 (poverstamykh) と徵募されていない者

第5表 トムスク郡の耕作勤務者数とその比率

	1664年	1672年	1699年
(A) 勤務者の総数	940人	962人	918人
(B) そのうち耕作勤務者数	256人	320人	367人
A : B	27%	33%	40%

第6表 トムスク郡の耕地面積 (単位デシャチナ)

デシャチナ耕地	102
国有耕地農民の自家用耕地	901
修道院農民の自家用耕地	111
トムスクのアレクセーエフ修道院の耕地	20
小作民の耕地	77
商工民の耕地	478
兵役に徴募されている勤務者の耕地	1,815
兵役に徴募されていない勤務者の耕地	830
計	4,334

(neverstanykh)との耕地面積を合わせて全部で二、六四五デシャチナとなるのである。⁵⁶⁾

以上のべたところをシュンコフが一覧表に作製しているのが、それを第六表として掲げておく。一八世紀の初期において、トムスク郡に在住した各種のロシア人によつて耕作されていた耕地面積は、一圃として第六表のような状態であつた。⁵⁶⁾

トムスク郡における農耕地開拓の初期には、当然のことながら国家のデシャチナ耕地が独占的な重要性をもつていた。しかし一七世紀の末には、発達してきた他種の耕地にその重要性を譲つたのであり、上の第六表によれば一八世紀の初期においては、国家のデシャチナ耕地はこの郡の総耕地面積のわずかに二・三%をしめるにすぎない状態になつた。

また一八世紀初期においてトムスク郡の農

民の数は、この郡の全ロシア人住民の約二七%を占めるにすぎず、勤務者(その大部分は軍人である)の数はその約二倍であった。トムスク郡は辺境の土地であったから、勤務者の比重が大きかったのである。また一七世紀においては、トムスク郡の毛皮の産出量も多かつた。⁵⁷⁾ 以上のような理由から、従来この郡の植民は軍事的・狩猟産業的な性格のものであると考えられがちであつた。しかし実際には、第六表でみるように、勤務者関係の耕作面積(二、六四五デシヤチナ)は、農民の総耕作面積(一、二一一デシヤチナ)より著しく大きかつたのである。これらのことを指摘した後シュンコフが、「トムスク郡住民の労働活動を熟視するならば、一七世紀においても、すでに植民の農業的性格が重大な意義をもつ」と強調しているのも当然である。かれの推算によると、一六六七年にはトムスク郡の勤務者に対する政府の穀物給料は、郡内産の穀物によつては約三〇%を自給し得たにすぎなかつたが、一七世紀後半にはしだいに自給が可能となりはじめ、一八世紀初期には勤務者に支給する穀物給料は、すでにトボリスクからの輸送なしでも恐らく困らなかつたであろう、と結論している。⁵⁸⁾

次にクズネツク郡の農耕地開拓である。この郡は全一七世紀と一八世紀初期とにおいて、附近の土着民族からしばしば襲撃されて損害をうけたような状態であつたから、耕地の開拓も農業の発展も困難であつた。⁵⁹⁾

クズネツク柵(Kuznetsk)は一六一八年に建設されたが、一六二〇年になつてもまだ農耕は開始されていなかつた。しかし一六二五年ごろまでに、国家のデシヤチナ耕地が始められた。シュンコフによると、その面積は第七表に示すような緩慢な増加ぶりであつた。この表でみると、国家のデシヤチナ耕地の発展状態において、一八世紀初期のクズネツク郡は前記のトムスク郡(一〇二デシヤチナ)の約半分にすぎない。クズネツク郡では土着民の襲撃の恐れがあつて、耕地の開拓は、柵の附近から遠く離れることができなかったといふ。⁶⁰⁾

クズネツク郡の地理的位置が、一七世紀の西シベリアの主要交通路から外れていたことと、土着民に襲撃される危険が

第7表 クズネツクのデシャチナ耕地の面積（1圃として）

年次	耕地面積（単位デシャチナ）
1628年	1 3 $\frac{1}{4}$
1660年	3 3.5
1683年	4 2
1697年	5 4
1701年	5 2
1705年	5 2

あることとのために、一七世紀にはこの郡へ流入するロシア人の自由移住者はきわめて少なかった。シュンコフによると、一六二八年にこの郡の全農民数はわずかに二五人であり、一六四〇年になつても陛下の耕地農民は三二人で、その間わずか七人の農民が増加したにすぎない。このような状態であつたから、クズネツク郡においては流刑者が比較的重要な意義をもつていた。すなわち、一六五二年の農民数五〇人のうちで、二七人が流刑者であり、一六六八年における農民数四〇人のうち、二〇人が流刑者であつた。その後クズネツク郡の農民数は、一八世紀初期までのあいだに一〇〇人にまで増加したのである。すなわち一六七四年——五三人、一六七八年——九八人、一八世紀の初年（一七〇〇年、一七〇二年、一七〇三年）——一〇〇人、一七〇五年——九六人である。クズネツク郡では修道院の農業は発達しなかつたので、上記の国有耕地農民一〇〇人が、この郡の農民の全部であつた。

これら国有耕地農民の自家用耕地に関する資料はないのであるが、シュンコフは、トムスク郡と同様に一世帯につき一圃の面積を一・八デシャチナとして計算し、農民一〇〇人で一八〇デシャチナと算出している。したがつて、一八世紀初期にトムスク郡の農民によつて耕作されていた畑の面積は、前述のデシャチナ耕地とこの自家用耕地とを合わせて、一圃で二三〇デシャチナと推算されている。

次には勤務者の耕地である。シュンコフが一七〇五年の予算摘要簿に基づいて掲げている一覧表によると、クズネツク郡の住民構成は第八表のようになっていた。この郡の住民の大部分は、トムスク郡と同様に、一八世紀の初めにもなお勤務者によつて構成されていたのである。クズネツク郡における勤務者の耕作は、すでに一六二〇年代から知られているが、前述の耕地農民の農業と同様に発展が困難であつた。そのことは、クズネツク郡の勤務者の全穀物給料のうちで、勤務者の耕地から収穫された穀物のしめる割合が五％―九％で、きわめて僅少であつたことにも反映している。この郡における勤務者の耕地面積は、シュンコフの推算によると、一六五一年―一六七五年の間において七〇―一〇〇デシヤチナとみられている。⁶³⁾

その後この勤務者の耕地面積は、一七世紀末から一八世紀初期にかけて増大し始めた。と推測しうるのであるが、クズネツク郡においては国家のデシヤチナ耕地も勤務者の耕地も少面積であつたから、郡内で生産される穀物をもつてしては、この郡の勤務者に支給する穀物給料を自給しえなかつた。トボリスクから輸送されてくる穀物は、一八世紀初期にもなお、この辺境のクズネツクへ移入されていた。シュンコフによると、クズネツクにおける国家の穀物給料は、一八世紀初期においてもライ麦はその必要量の七七％を、また燕麦は五三％を、トボリスクからの輸送穀物に依存していたといふ。⁶⁴⁾

なおクズネツク郡の商工民は、第八表のように一七〇五年にわずか六一人で、この郡の全住民数の一一・七％にすぎなかつた。かれらの耕作していた農地も確かにあつたが、あまり発展しなかつたと思われる。

要するに、クズネツク郡は一八世紀初期になつても、穀物の移入される地域として止

第8表 クズネツク郡の住民構成(1705年)

	人数	比率(%)
勤務者と小作民	368	70
商工民	61	11.7
国有耕地農民	96	18.3
計	525	100

まつていたのである。

結 言

一六世紀末にシベリアを獲得したロシア政府は、この新領土を確保するために植民する必要がある、また現地における食糧の自給をはかるために、シベリアに耕地を開拓する必要があつた。そのために、一六世紀末から一七世紀にわたつてロシア政府が試みた二つの方法、すなわち欧露の農民を強制的に西シベリアへ移住させ、あるいはシベリア流刑者の一部分を西シベリアの耕地開拓に利用しようという方法は、ほとんど顕著な成果をあげなかつた。最も効果があつたのは、欧露からシベリアへ逃亡してきた自由移住者を耕地に定着させる方法であつた。ロシア政府は、一七世紀前半までは一般にシベリア移住を奨励し保護する政策をとつたが、一七世紀後半になると、地主の利益を守るために農民の逃亡を阻止する政策をとつた。しかし実質的には、シベリアへの逃亡は黙過されたというべき状態で、「沿海地方」から多数の逃亡者がシベリアへ流入し、シベリアの人口は増大し、耕地面積は著しく拡張された。

シベリアで移住者が最も多く定着したのは、西シベリア西部のヴェルホトゥリエ・トボリスク地域であり、ここでは一七世紀中に著しい面積の耕地が開拓されて、シベリアの主要な穀倉地域となつた。西シベリア東部のトムスク・クズネツク地域における植民の進行は緩慢で、耕地の開発もあまり発展しなかつた。一七世紀における西シベリアの耕地開拓において注目すべきことは、耕地がしだいに南方へ進出した事実である。ロシア人移住者は、初期には西シベリアの比較的北方へ流入したが、一七世紀後半になると益々南部へ流入するようになり、ロシア人の開拓前線は西シベリアの森林帯から出て、その南方の森林ステップ帯へ進出したのである。

附記 本稿執筆に使用した文献の複写には、東大東洋文化研究所、東洋文庫、京大附屬図書館の御援助を得た。またソ連科学アカデミー歴史学研究所のシモンコフ教授 (V. I. Shunkov) からは、一七世紀シベリアの植民史と農業史とに關する二冊の画期的な著書の寄贈をうけることができた。上記の各位に対して深い感謝の意を表する。

- 註 ① 一七世紀のシベリア史およびシベリア植民史に關する、史料および諸文献の批判と解説は、左記にみえる。
- Andreyev, A. I.: *Ocherki po istochnokovedeniyu Sibiri. Vypusk pervy. XVII vek. Moskva, 1960.*
- Tomashevsky, V. V.: *Kratky obzor istochnikov i literatury po istorii kolonizatsii Sibiri i Dalnevo Vostoka v XVII v. (Tikhonitrov, M. N. red.: Sbornik statey po istorii Dalnevo Vostoka. Moskva, 1968. str. 89-111)*
- ② 拙稿「ロシア人の西シベリア征服と毛皮資源(史淵「八回轉」昭和三十六年)。九九—一〇〇頁。
- ③ Bakhrushin, S. V.: *Ocherki po istorii kolonizatsii Sibiri v XVI i XVII vv. (Nauchnie trudy. III. Moskva, 1965). str. 149.*
- ④ *Pereselenskoye Upravleniye Glavnoye Upravleniye Zemleustroistva i Zemel'del'ya: Aziatskaya Rossiya. Tom I. S. Peterburg, 1914. str. 442.*
- 田田半路監譯「シベリア植民史」。田田二〇頁。一〇頁。
- ⑤ 拙稿「ロシア人以前の西シベリア開拓—南部諸民族の農耕—(人文地理「九卷五号」昭和三年)。一四頁。
- ⑥ Shunkov, V. I.: *Ocherki po istorii kolonizatsii Sibiri v XVII—nachale XVIII vekov. Moskva, 1946. str. 11—12. Idem: Ocherki po istorii zemledel'ya Sibiri. XVII vek. Moskva, 1956. str. 305, 430.*
- ⑦ ホリン・ユスマン帝時代(一五九八年—一六〇五年)の勅令には、徵舞者に対し各人に馬三匹、牝牛三匹、山羊二匹、豚三匹、羊五匹、がちょう二羽、雌雞五羽、おひる二羽、パン用穀物一年分を与えよとあり、なおすべての移住者に犁、荷車、そり、および一般に生活必需品すべてを与えるのを命じ、また援助金として各人に二五ルーブルを与えよとの命令がある。(Serap-him, H. J.: *Die ländliche Besiedlung Westsibiriens durch Russland. Jena, 1923. S. 23)*
- ⑧ Shunkov, V. I.: *Ocherki…… kolonizatsii Sibiri. str. 13—14.*
- ⑨ *Ibid. str. 15—16. Aziatskaya Rossiya. Tom I. str. 180.*
- 田田半路監譯「前掲」。二九〇頁。

⑩ Shunkov, V. I.: *Ibid.* str. 16-21.

シベリア流刑の研究書を刊行したアメリカのケナンは、次のような意味のことを記述している。一七世紀前半ごろには流刑そのものは罰とはみなされておらず、手足を切断するなど残酷野蛮な方法ですべてに処刑された無益な人間を、ロシア社会から除く迅速簡易な手段として流刑が考えられていたのである。それが一七世紀の後半になると、ロシア政府の考え方が變つてシベリア新領土の人口を増加し開發するための植民とみるようになり、刑法そのものもそれに対応して變化した。一七世紀末になると、処罰の方法として身体の一部を切断することは廃止され、その代わりに、そしてまた死刑の代わりにさへも、罪人をその全家族とともにシベリアへ流刑にするという幾多の勅令がみられ、また流刑を適用される犯罪の範囲も大いに拡張された。(Kennan, G.: *Siberia and the exile system.* London, 1891. pp. 74-75)

しかし初期の流刑者でも、すべてが不具になるような処刑を受けた無益の者ばかりだったわけではないのであろう。また一七世紀のシベリアにおける流刑者は、流刑地で牢獄に閉じこめられる場合はまれの場合である。

すでにミハイル・フォードロヴィチ帝(在位一六三三年—一六四五年)の時代に、流刑者を勤務者に任命して普通の俸給をあたえるか、または農民にして國庫の補助を与えるかすべしという勅令がだされており、その際、

一七世紀西シベリアの植民と農耕地開拓(三五)

これらの流刑者はすべて流刑地に到着すると直ちに自由の身となり、國家の援助をうけている他の移住者と平等の地位になつたといふ。(Azatskaya Rossiya. Tom I. str. 442. 沼田市郎訳編、前掲。七〇頁)

いずれにしても、一七世紀において流刑は刑罰のために行われたというより、むしろ辺境植民を目的とするものであつたと考えられるが、本文に記述したように、シベリアの農地開拓に寄与した意義は小さかつたようであらう。

ロシア政府が、シベリア流刑者をシベリア開發のための労働者として特に重視するようになったのは、一八世紀になつてシベリア各地の鉾山が開發されるようになってからである。

⑪ Azatskaya Rossiya. Tom I. S. Peterburg, 1914. str. 445-446. 沼田市郎訳編、前掲。七五—七六頁。

シマンロフによる「村 (sloboda) とは」呼称は一七世紀には二重の意味をもつていた。一方では、それは移住地として割当てられた地方における最初の移住地で、その地区のすべての部落にとつて中心地となつていゝものである。ここには柵、教会、領地管理人の館、帝室の倉庫があつた。村のなかには教会の僧侶、裁判の書記、勤務者であるコサツクが居住していた。村にはまた農家の一部分があり、村の近くには皇帝のデシヤチナ耕地が配置されていた。他方では、村は上述のような狭義の村とそれに所屬した諸部落 (dereveni) とから構成さ

- れる領域である。なお開墾地 (zaimka) とよばれたもののうちには、居住農家のなごもみまされた。開墾・開墾地の大きければ、農家が一旦おこなふ数回しかならぬともあれば、一七世紀末にすべし二〇数回に達した部落もあり、四三回あるものは七〇回とごう特に大きな部落であった。(Shunkov, V. I.: Ocherki... kolonizatsii Sibiri. str. 89-91)
- ⑳ Lyshchenko, P. I.: *Istoriya narodnovo khozyaistva SSSR. Tom I. Moskva, 1952. str. 279 i sled.*
 額田貫一「ロシア探検史。昭和二十年。五六一―七〇頁。「沿海地方」ところの注。一六世紀に北極ロシマの白海および北極海に臨む地域をよんだと称せらる。初めは白海沿岸の地域を指すものが多かったが、一六世紀後半にキリシトのおもむいたに貿易航路がひびかれ、シベリア流域地方など海洋と密接な関係をおもむいたが、沿海地方」は北極ロシマと同義語になつてつた。オネガ川、北マヴァナ川、スホナ川、ウァチエダ川、スチマラ川などの流域地方を指してらる。(Tikhomirov, M. N.: *Rossiya v XVI stoleti. Moskva, 1962. str. 227*)
- ㉑ 拙稿「西シベリアの民族およびウラル越え交通路。(史淵) 十三輯(昭和三二年)。六四―六六頁。
- ㉒ *Aziatskaya Rossiya. Tom I. str. 445.* 梶田中良 訳纂「龍潭。廿四―廿五頁。
- ㉓ Shunkov, V. I.: *Ocherki ... kolonizatsii Sibiri. str. 49-50.*
- ㉔ Aleksandrov, V. A.: *Proiskhozhdenie russkovo naseleeniya Yeniseiskovo kraya v XVII v. (Sibirskiy etnografichesky sbornik. IV. [Trudy Instituta Etnografii. LXXVIII]. Moskva, 1962). str. 11-12, tablitsa 1.*
- ㉕ Ustyugov, N. V.: *Solevarennaya promyshlennost Soli Kamskoy v XVII veke. Moskva, 1957. str. 147.*
 Idem: *Krestyanskaya kolonizatsiya yuzhnoy chasti Solikamskovo uyezda vo vtoroy polovine XVII v. (Novoselsky, A. A. i dr. red.: Materialy po istorii selskovo khozyaistva i krestyanstva SSSR. Sbornik V. Moskva, 1962). str. 84-86.*
- ㉖ Preobrazhensky, A. A.: *Ocherki kolonizatsii Zapadno novo Urala v XVII-nachale XVIII v. Moskva, 1956. str. 39-42, 59-60, 86-88.*
 トラホトヴィツェンスキーの記載によれば、ケンダール郡の農家戸数は、一六四八年から一七〇三年にわたる五年間、三〇九戸から三、七六九戸に増加し、約二二・一倍になつたのである。
- ㉗ Trofimov, P.: *Ocherki ekonomicheskovo razvitiya yevropeiskovo severa Rossii. Moskva, 1961. str. 30.*
- ㉘ Shunkov, V. I.: *Ocherki ... zemledeliya Sibiri. str. 148-149, 411, 428.* Boyarsinova, Z. Ya.: *K*

⑤⑧ Ibid. str. 73-76.

⑤⑨ Boyarsinova, Z. Ya.: op. cit. str. 77-78.

⑤⑩ Shunkov, V. I.: Ocherki... zemledeliya Sibiri. 1956. str. 77-78.

⑤⑪ Ibid. str. 79.

この時代の農民やコサックの人数とか耕地面積とかは、史料によつて幾分の相違があり、またシュンコフの論文とボヤルシノワの論文との間でも、必ずしも数値が一致しているわけではない。しかしボヤルシノワの掲げている資料によつて、一圃としてのトムスク郡の総耕地面積を計算してみると、四、四一二デシヤチナとなり、シュンコフの総耕地面積四、三三四デシヤチナとの間に著しい相違はなご。

⑤⑫ 拙稿、ロシア人の西シベリア征服と毛皮資源。(史淵、八四輯、昭和三十六年)。一一〇—一一一頁。

⑤⑬ Shunkov, V. I.: op. cit. str. 79, 80-82.

⑤⑭ たとえば一六七四年の住民の嘆願書には、一六三八年、一六四〇年、一六六五年、一六六七年、一六七三年および一六七四年に襲撃されて大損害をこうむつたことを訴へてゐる。(Ibid. str. 82)

⑤⑮ Shunkov, V. I.: op. cit. str. 83-84.

⑤⑯ Ibid. str. 85-87.

⑤⑰ Ibid. str. 88.

⑤⑱ Ibid. str. 88-90.

クズネツク郡の勤務者の全穀物給料のうちで、勤務者の耕地から得られた穀物の占める割合は、シュンコフによると、一六五九年—九%、一六六三年—七・四%、一六六五年—七・一%、一六七三年—四・九%、一六七七年—六・二%、一六七九年—五・三%にすぎなかつた。

⑤⑲ Shunkov, V. I.: op. cit. str. 90.

(昭和三八年三月三一日稿)